日に新たに 心豊かに たくましく　　令和5年10月2日（月）　第7号

南浦和中だより

〒336-0026 さいたま市南区辻 6－1－33　TEL 048(863)0753
FAX 048(836)1589　さわやか相談室直通 TEL 048(837)5909

『夢の中へ』

校　長　大河内（おおこうち）　範一（のりかず）

「読書の秋」が到来したが、読書は実に楽しい。没頭すればするほど空想の世界に入り込むことができ、現実世界を忘れさせてくれる。１冊の本が夢の世界にいざなってくれるのである。

小学校高学年の頃、モーリス・ルブランの『アルセーヌ・ルパンシリーズ』を、自分の小遣いで毎月１冊ずつ購入して集めていた。（ルパン三世じゃないですよ…）神出鬼没の怪盗紳士が登場する冒険小説で、ハラハラドキドキしながら読んだものだ。『奇厳城』、『８１３の謎』は繰り返し読み、特に印象に残っている。

中学３年生の冬は、日本文学にかなり傾倒していた。武者小路実篤の『友情』を読み、「青春時代において、男同士の友情と恋愛とではどちらが大切か」というようなことを受験勉強の傍らに考えていた。懐かしく、ちょっぴり恥ずかしい。

高校３年間は、本を年間１００冊読むことを目標とし、学校や公共の図書館によく通っていた。目標はほぼ達成していたものの、ジャンルとしては赤川次郎やアガサ・クリスティなどのミステリー（推理小説）ばかりだったのが玉に瑕（きず）である。夜、少し読書をしてから寝ようと読み始めたら最後、途中で止められなくなり、犯人のトリックが暴かれる頃には、白々と夜が明けていたということもよくあった。

大学に入る前の浪人時代は、勉強をするために公共の図書館を利用することが多かった。早朝から図書館に並び、開館と同時に座席を確保したものの、井上靖の『氷壁』や夏目漱石の『明暗』のような分厚い本を読み始め、ついつい閉館まで読み続けてしまったということがたまにあった。その後、一日中勉強したかのような何食わぬ顔で帰宅していたのだが、もう時効なので白状するとしよう。

最近では、ＢＯＯＫ・ＯＦＦに立ち寄ることが趣味の１つになっている。１００～２００円のコーナーを眺めては、割引率が高く、新品と変わらない綺麗さを保っている本を見つけるということに、ちょっとした喜びを感じている。

さて、以前何かのコラムで読んだ話なのだが、読書の方法には、本をじっくり読む『精読（せいどく）』、早く読むことをよしとする『速読（そくどく）』などがあるが、気になった本を手当たり次第に読んで、興味があるページに出会ったら目を止めるという『乱読（らんどく）』を勧めている読書家がけっこう多いとのことだった。乱読は読書量を圧倒的に増やすことができ、「思わぬものを発見する力」が身に付くとも言われている。とにかく、読書はいいこと尽くめなのである。

さあ、皆さん。知識を増やすために、創造力を磨くために、視野を広げるために、読解力を高めるために、どんどん本を読みましょう。くれぐれも買った本を読まずに積み重ねておくだけの『積読（つんどく）』にならないように気を付けてくださいね。